



2000 3.31 今、考える 有珠山噴火

2000年3月31日午後1時10分ごろ。有珠山西側のふもとから発生した噴煙は無数の噴石と火山灰を噴き上げ、泥流と地殻変動が見慣れた景色を一変させました。

今を生きる私たちは噴火の影で何が起き、この時代に何が必要とされているのか知ることができません。虻田町として初めての全町避難が行われ、一人の犠牲者も出さなかったこと。復旧までには多くの混乱があり、苦しい生活を強いられた避難者もいたこと。そして、噴火からすでに四半世紀が経ち、「次」を意識した備えが求められていること―。

2000年噴火から25年の経過を機に、町は3月31日、パネルディスカッションを開催しました。識者だけではなく噴火を経験した町民も登壇して意見を交わし、対策のための知恵を探る貴重な場となりました。

今号ではディスカッションの内容を紹介します。火山と共生する町の未来を考えるための一助となれば幸いです。

備えるのはわたしたち――

有珠山に学ぶ火山防災

2000年有珠山噴火から25年を迎えた3月31日、洞爺湖文化センターでパネルディスカッションが行われました。議論の内容を紹介しましょう。

下道 2000年噴火では約1万人が避難し、住宅のほか消防庁舎など公共施設も被災した。2000年噴火の特徴とは。

避難所には180人ぐらいたが、温泉地区の飲食店やホテルの料理人がいたので思いのほか自炊がうまくいった。

宇井 噴火が有珠山のどこで起きるかわからず、噴火現象

でも2人と夫の4人で避難した。家族の家にいたが申し訳

登壇者（敬称略）

▼パネリスト

宇井忠英（北海道大学名誉教授）

が長丁場だったが規模は小さめだった。また、日本で初めて噴火予知情報が発表された噴火だった。

なさを感じ、子どもが入学する小学校の情報を得るためにも豊浦町に避難した。避難所では高校生が子どもと遊んでくれてとても助かり、思いやりの大切さを実感した。

谷口正実（札幌管区気象台火山対策調整官）

谷口 1978年から活動火山対策特別措置法が施行された。2007年から噴火警報・噴火警戒レベルが運用されるようになり、有珠山についても警報とそれに付随したレベルが発表されるようになって

いた。転院が必要だったが、近隣の病院は空きベッドも看護師も少なく患者の収容は困難を極めた。2000年噴火では、噴火予知情報をもとにただちに病院に早期避難を提案し、患者・職員全員の避難を決定した。

依田信之（とうや湖温泉旅館組合監事）

山田 1977年の噴火では勤務先の病院に数百人の患者がいた。転院が必要だったが、近隣の病院は空きベッドも看護師も少なく患者の収容は困難を極めた。2000年噴火では、噴火予知情報をもとにただちに病院に早期避難を提案し、患者・職員全員の避難を決定した。

いた。転院が必要だったが、近隣の病院は空きベッドも看護師も少なく患者の収容は困難を極めた。2000年噴火では、噴火予知情報をもとにただちに病院に早期避難を提案し、患者・職員全員の避難を決定した。

山田晃（入江1区自治会自主防災組織本部長）

山田 豊浦町の児童館を病院の診療機能を持った施設として使わせてもらい、病院から避難した患者が来院した。しかし、診療所としての面積、基準を満たしていないとして

いた。転院が必要だったが、近隣の病院は空きベッドも看護師も少なく患者の収容は困難を極めた。2000年噴火では、噴火予知情報をもとにただちに病院に早期避難を提案し、患者・職員全員の避難を決定した。

荒町美紀（洞爺湖有珠火山マスタースター）

依田 年度末の噴火で予定されていた歓送迎会が中止になり、ホテルとしても大変困った状況だった。私が避難した

いた。転院が必要だったが、近隣の病院は空きベッドも看護師も少なく患者の収容は困難を極めた。2000年噴火では、噴火予知情報をもとにただちに病院に早期避難を提案し、患者・職員全員の避難を決定した。

▼コーディネーター
下道英明（洞爺湖町長）

下道 当時、宇井先生に避難指示と解除の意見をいただきたいが、どのような考え方で決められたのか。

いた。転院が必要だったが、近隣の病院は空きベッドも看護師も少なく患者の収容は困難を極めた。2000年噴火では、噴火予知情報をもとにただちに病院に早期避難を提案し、患者・職員全員の避難を決定した。

――2000年噴火を振り返って

いた。転院が必要だったが、近隣の病院は空きベッドも看護師も少なく患者の収容は困難を極めた。2000年噴火では、噴火予知情報をもとにただちに病院に早期避難を提案し、患者・職員全員の避難を決定した。

いた。転院が必要だったが、近隣の病院は空きベッドも看護師も少なく患者の収容は困難を極めた。2000年噴火では、噴火予知情報をもとにただちに病院に早期避難を提案し、患者・職員全員の避難を決定した。

――避難生活から生活再建へ

下道 当時、宇井先生に避難指示と解除の意見をいただきたいが、どのような考え方で決められたのか。

宇井 ヘリから観測すると山頂の北西に異常が集中していると見当が付いた。噴火が始まってから火口の位置が当初考えていたよりも人の住んでいる地域に近いことがわかり、緊急避難区域を拡大した。噴火の前兆が始まってからハザードマップを根拠に避難指示区域などを決めた。万が一を考え、月浦地区まで区域を拡大したが火口が旧虻田町の市街地寄りだったため、さらに拡大した。その後はヘリで噴火状況を監視し、シミュレーションを行って1、2週間ずつ区域を縮小した。



霞が関」として現地に入っていた。

谷口 避難指示区域の立ち入りなど多くの課題があったが、即断・即決できる権限を持った国の省庁の局長クラスが集まったことが早期対策につながったと思う。

――避難生活について

山田 豊浦町の児童館を病院の診療機能を持った施設として使わせてもらい、病院から避難した患者が来院した。しかし、診療所としての面積、基準を満たしていないとして

――現地対策本部の状況

下道 当時、ホタテ養殖の作業のため強い要望があったが、非常にスムーズに対応してもらった。現地対策本部に霞が関の省庁が集まり「ミニ



伝え続ける 噴火の記憶



山田晃氏

依田信之氏

谷口正実氏

診療報酬の請求が認められなかった。薬代などの費用の一部は病院の持ち出しになってしまった。

下道 診療所の開設に大変な苦労があった。法的規制が障害になった教訓を今後に残さなければならぬ。

依田 火山灰の徐灰が進まなかったが、緊急地域雇用対策事業で地域の人が手伝って来て何とか営業できた。復旧工事の宿泊を受け入れるようになってからは忙しかったが、空振を恐れてキャンセルする人もいた。

荒町 仮説住宅に入ったが必ず最低限の家電以外無く、自宅からは衣類しか取り出せなかった。友人に連絡して使っていない家電を使わせてもらった。平穏な生活の大切さを感じた。

―次の噴火に備えて

谷口 地震計が2000年当時の4点から12点に設置されるなど比喩物にならないぐらい観測体制は強化された。火山対策に当たる職員も

2000年当時は10数人だったが、現在は40人以上に増えている。

山田 平成27年に町から要請を受けて自主防災組織ができた。発足から10年経ち、噴火の防災意識は高まっている。住民同士のコミュニケーションを取りながら活動を続けた。

依田 避難所で自炊ができるのと温かい食事ができる。温泉地区には調理師が多い。避難所で責任を持って食事づくりができるよう、年に一度でも大量調理の研修が行えればよいのではないか。

―2000年噴火後の取組

宇井 火山マイスター制度を始め、先頭に立って次の噴火に備えて行動できる人材育成を行った。

荒町 私の火山マイスターとしての活動は、町内の中学生と避難所開設体験を行うことなど。今の中学生は噴火のことをよく知らない。マイスターは噴火に備えることの大切さを伝える仲間。一人でも

近くにいると心強いと思ってもらえるとうれしい。

―今後の課題

宇井 2000年と全く違うのはインバウンドの増加とSNSによる偽情報の拡散。外国人が逃げられるようにQRコードとスマートフォンを使い、各国語で避難情報を得られるようにしてほしい。ワイラジオを活用し、偽情報をチェックして情報を伝えられる仕組みもつくるべきだ。

荒町 ワイラジオは1市3町で運営するコミュニティFMで、精査した情報を発信している。ラジオは車でもスマホでも聞けるので災害時は利用してほしい。

下道 避難所環境の改善、防災備蓄の整備、広域連携の仕組みづくり、防災協定の締結などを行政として進めている。防災・減災に最も必要なものは人の意識。噴火から25年も経過し、噴火を知らない住民も多くなった。今一度、有珠山噴火の備えを考えてほしい。(関連記事10ページ)